

青少年アンビシャス運動シンポジウム講演録

「デッカイ夢さえあればなんとかなるさ」

理学博士 秋山 仁

平成14年2月17日

イムズホール（福岡市中央区天神）

こんにちは、秋山です。今日は90分ぐらい時間をいただきまして、「デッカイ夢さえあればなんとかなるさ」というタイトルでお話しさせていただくことになっているわけですが、実は少々勘違いしていたことがありまして、このようなタイトルにさせていただいたのは、青少年健全育成の一環としてこの会があって聴衆の方々には青少年の方が多くはないかと勝手に推測していたのであります。聴衆席を見まわしてみますと、その通りとは言いづらいところがありますが(笑)、青少年アンビシャス運動が示している12の方向の最初の1つに「大人もまず意識を変えて子ども達に見本を示さなければいけない」というものが掲げられていました。私も同感しますが、これにしたがうと『青少年にデッカイ夢を抱かせるためには大人こそがまずデッカイ夢を描いて、そして歯を食いしばってその夢を実現させよう。こういうふうに頑張ることで、子ども達が「よし、俺もやってみよう」という気になるのではないか』という命題も成り立つということになりますので、このままのタイトルでお話を進めさせていただくことに致します。

私は全国いろんなところに講演に行く機会がありまして、各地のPTAの様々な活動を拝見させていただいておりますが、何週間か前に私の研究所に送っていただいた“青少年アンビシャス運動100人委員会中間報告”をじっくり読ませていただいて、皆様の活動は他の都道府県でも中々見られない本当に素晴らしい活動だと思いました。いろいろな意見や提言が書かれていましたけれども、今年の4月から始まる、新教育課程に非常に近い考え方だと感じました。

実際に、このくらいの体制が各都道府県でできていないと、新教育課程にならって、土曜日がお休みになったり、授業時間数が削減されたり、カリキュラムが減ったときに、子どもたちはただ遊んだり、ただ学習塾通いが激化したり、またはコンピューターゲームを土曜日一日中朝から晩までやったりするだけになってしまいがちでこうなってしまうのであれば、新教育課程になっても子どもが健全に育成される保証は中々できないと思うのです。土曜日の完全休日化は平成9年の中央教育審議会で既に決定されていたわけですが、なぜ、こんなふうにしたのかといえば、「学校が、子どもの教育を一手に引き受けさせられている傾向があり、パンク寸前である。子どもたちを、家庭や地域に

返して、もっと大人たちに、子どもの教育に参加してもらおう」というのがそもそもの理由であったと思います。地域等の大人たちの協力なくして、新教育課程の謳う教育は実現不可能なのであります。様々な種類の受け皿が福岡県の様々なところにある、これがとても重要なのです。けれども、そのためには、大人の方々に“子ども達を健全に育てていこう”と強いられてやるというのではなくて、ボランティアとして自発的に。「子どもは社会の宝、未来からの留学生なんだから彼らを大切にしよう。手間暇かけて育てよう」というふうには大人社会が変わることが、すなわち世の中が良くなることになるのではないかと考えています。

今年の4月から新教育課程が実施され、学校が変わります。国民の方々は必ずしも今年度の4月から始まる新教育課程がいいというふうには思っていないようです。先ほど司会の方が、教育課程審議会の委員をやっていたと私を紹介してくださったのですけれども、「学力が低下するかもしれないと懸念されている新教育課程を作ったやつのか」という視線を何となく感じました(笑)。しかし、そういうふうに使われている方が多く、新教育課程によって学校がどんなふうになるのか、そして、それはどういう目的でそういうふうに変えることになったのかということをも必ずしも十分に理解されていないように感じております。

よくご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、まず、新しいカリキュラムで、どんなことが変わるのかということについて復習させていただくとともに、どんな理由でそんなふうに変えようとしているのかということについて簡単に補足させていただきます。

1つ目は、土曜日が完全休日となって、完全週五日制になることです(ただし、土曜日については、学校裁量に任されているので、土曜日の使い方によって各学校の特色が出てくると言われています)。週休二日制については、平成9年の中央教育審議会が決定しました。週休二日制導入に対しても賛否両論分かれるところですが、当時の記事等を見ると、たくさんの課題や問題を抱えてパンク寸前になりつつある学校の状況を踏まえて“学校のスリム化”と同時に、“子どもたちをもう少し家庭や地域に返して、多くの人に子どもたちの教育にもっと参加してもらおう”という目的が主だったようです。日本では土曜日が休みになるということに違和感を感じる人が少なくないようですが、お隣の韓国や台湾などでは、これまでの日本と同様に土曜日は休みではないのですけれど、欧米諸国をはじめ、土、日が休みという国々は世界的に見ると少なくないんです。まあ、それはともかくとして土曜日の休日化によって、授業の時間数が少しだけ減ることになりました。

2つ目の変更点は、既存の各教科の授業時間数が一律に2割ほど削減されることになったという点です。土曜日の休日化に加えて、新たに、“総合学習の時間”を導入するこ

とになったためです。「算数の授業時間数はこのまま残して、他教科をもう少し削ろうよ」と言っても、“知・徳・体のバランスの良い教育が必要だ”ということで、特定の教科だけ優遇することにはコンセンサスが得られず、どの教科の時間も一律に削減されることになったわけです。

3番目は各教科の時間で教えるカリキュラムの内容も削減されたことです。これについては、授業時間数削減が先に決まってしまう段階で、さてカリキュラムをどうするかという話し合いが行われたわけですが、その時点で、考えられる選択肢は次の3つです。

まず、第1の選択肢は、「今まで教えてきたことは全部大切だから、時間数が2割減らされたって今までどおりの内容を全部頑張るんだ、削り落とすところはない。厳選などといっても無理なのだから従来通りの量をこなそう」という意見です。しかし、この案には、今まででも問題になっていた、いわゆる“授業についてこない生徒”を増加させることにつながる大きな危険性がありました。

2番目は、「時間数を2割削減したのだから、それに比例してカリキュラムの内容も2割削減しよう。そうやって今までと同じペースで消化しよう」という意見。これは一見無難な意見ですが、これでは、量に比例してそのまま学力も2割低下してしまう確率が高い案です。これでは困ります。

3番目の選択肢は、時間数の削減が諸般の事情で止むを得ないのならば、「教育の質の向上を目指すべきだ。そのためには、カリキュラムの内容を厳選し、意欲、関心、思考力や表現力をつけさせると同時に、将来につながる自己学習力を育成しよう」という案です。日本の教育の弊害は、各内容を深く掘り下げることなしに、ただ沢山のことを生徒たちに教え込んできました。そして、その結果、消化不良を起こして、定着率が悪かった。だから、折角、教えたことも時間の経過とともに忘れてしまっていた。十八歳の時の学力は、世界でトップクラスであるといわれているにもかかわらず、大学に入学した途端伸びきったゴムのように学業意欲を失くしている学生が多い。特に、ここ数年、大学生の学力低下（知識の量云々というよりも、学習意欲の低下、自己学習力の低下を指摘する人が多いようです）が目につくようになってきたと言われていています。高校や大学の先生方に聞くと「何か昔と違う、昔はもう少し授業に食らいついてきた。もうちょっと受講姿勢が良かった、もうちょっと頑張った。嫌いな科目でも、自分は〇〇をマスターするんだと挑戦したものだ。でも、何か最近は何かが・・・」という感触を日々感じている人も少なくないようです。そして、こういった現象は名門大学の学生にも及んでいると聞きます。こうなったのはカリキュラムを年々減らしてきたからだという声も聞きますが、有名大学合格者リスト等を見ると、中・高一貫の私立や国立校出身者の数が圧倒的多数を占めていますね。このこと等を考えると、小さい頃から塾などに通い、随分と

勉強させられて大学に入ってくる学生が“学力低下している”となるわけで、単にこれまで行ってきた“カリキュラムの量や学校の授業時間数の削減”だけが原因だとも言い切れないと思います。すなわち、カリキュラムの量よりもむしろ学習の質、教育の質に問題があるのではないかということなのです。しかし、教育の質を変えようにも、先生たちや学校は「このままでは忙しくてできない」ということになる。だから、時間数は約2割削減されるが、カリキュラムの内容はそれより多く約3割削減して、それによって生じる“ゆとり”を授業の質の向上に当ててもらおうということになって、カリキュラム内容は約3割削減ということになったというわけです。ただし、いままでと大きく違うことは、今回の指導要領に記された内容は、ミニマムだということです。すなわち、次に挙げる“評価法の変更”とも関連することなのですが、全員に徹底する内容が指導要領に記された内容であって、ここに記していない内容であっても、生徒の能力や興味に応じて教えるべしとされていることが、今までとは大きく相違する点です。TVや著書などで、文部科学省の寺脇研政策課長が

「今回の学習指導要領はミニマムをこうするということである。全員が最低限こなすルマをこのように押さえ、それによって生じるゆとりを各自の個性、興味に沿った学習に向けてもらうのだ」

という主旨のことを述べていましたが、欧米では既にこのような方向で教育が行われていましたし、シンガポールをはじめアジア諸国の教育もこのような方向に転換しているとしています。

私の解釈ですが、カリキュラム削減によって生じるゆとりによって何を目指しているのかというと、主に次の2点だと思います。

- ① 厳選した基本を全生徒に徹底すると同時に、各生徒が有効に授業時間を享受できるように、各教科の授業の行い方を工夫し、質を高めていくこと。
- ② 従来の知識注入一辺倒の学習から生徒の自己学習能力を育む学習を導入し、生徒一人一人が目的と学び甲斐を持てる学校教育に変えていくこと。すなわち、「小・中学校の段階で未知なるもの未得なるものに対する好奇心を喚起し、生徒たちが主体的に学習し、ものごとに取り組む姿勢やそれらを自力で獲得していく能力、すなわち、自己学習能力を伸ばす（総合学習導入の目的）。さらに、高校以上の段階では、そのようにして各生徒に芽生えた興味、関心にこたえる多様なカリキュラムや教育環境を提供していく（個性重視の教育）」ということ。

これら2点を実施していくために、従来の形の各教科の時間数は2割削減し、「最低限これだけは習得していないと卒業を認めない」というミニマムを従来の約70%の量に定めたということです。「高校進学者が90%以上となったのだから、今まで社会に出るために必要だと国民に義務としてきた内容（中学までの内容）を高2までの間にキチッと習得してもらいたい。それ以上の内容は意欲と各人の能力に応じて学べるようにする。すなわち、こ

れまでは、小・中でハイペース、高校、大学でスローペースもしくは遊んでしまうといった形だったのを、小・中をスローペースにして、高校、大学でキチッと学ぶ形に変えたいというのが実質的なところで、削減といわれているけど学習総量は変わらない」ということも寺脇氏は述べています。

4番目の変更点は“成績評価”を従来の“クラスで何番”といった「相対評価」から、各項目ごとに明確に定めた到達度に対して、各生徒がどの到達レベルまで理解できたかによって評価する「絶対評価（到達評価）」に変えて、通信簿の役割を変えようとする点です。“評価”については本当は重要なんだけど、カリキュラムの話に比べてあまり触れられる機会が少ないように思うので、少し時間をとってお話させていただきます。学校での生徒間の「競争」については、「社会に出たら厳しい競争に直面するのだから、教育の場に他者との比較を持ち込むことが有益」という意見もあるのですが、これには、（特に小・中学校ぐらいまでの年齢では）デメリットの方がはるかに多いと思います。このことについて、2001年の『ジャパントイムズ・ウィークリー』2月10日号の社説に興味深い指摘がなされていたので抜粋・意識して紹介しましょう。

「競争は活力を生むといわれるが、競争で生き残るためには自尊心が欠かせない。自尊心は失敗を恐れずに難題に立ち向かう力を、人に、とくに子どもに与えてくれる。しかし、日本では両親も教師も、子どもの精神面でのこうした強さを育む努力を怠っている。そうした自尊心を育むためには、大人たちが描く“いい子像”を子どもに押し付けて演じさせてしまうのではなく、子どもの長所も短所もさらけ出させ、失敗することにビクビクしなくてすむ環境を大人が作り、その中で子どもを激励しながら成長を促していくことが大事なのだ—」

褒める、激励することの意義と言えば、数年前に発表された米コロンビア大学のクローディア・ミューラー博士らの研究結果も、評価・指導のあり方を考えるうえで重要でしょう。その研究結果によると、「賢い」と褒められて育った子どもは、“能力は固定的なもので、後天的な努力よりも先天的な能力によってほぼ決まっている”と考え、失敗すると次回への挑戦意欲を失いがちであるという。一方、「努力すること」を褒められて育った子どもは、先天的な能力よりも、努力して少しでも能力を伸ばすことに価値を置き、失敗しても今回は努力不足だったと考え、次回に頑張ろうという意欲を示す傾向が強かったということでした。すなわち、成績やテストの結果ではなく、学習プロセスで努力したか否かに照準を合わせて子どもたちを育むことが大切だという結論なのです。

これらのことを考え合わせると、子どもたち一人ひとりが意欲を持って生きていくようにするためには、学校で行われる「評価」が「査定」という役割から脱皮し、各自が自分を伸ばすために、前回より今回はどれだけどのように進歩したのかを確認でき、かつ、次回はどんな目標に取り組みればよいのかを具体的に指南し、今後の努力や取り組みを促進する「ナビゲーション」の役割を目指すべきだと思います。

従来のように、たとえば五段階の相対評価で「5だから良い」、「2だからもっと頑張れ」

という評価をしているのでは、どの生徒も、どこをどう改善し、どんな目標に向かって進んでいけばよいのかが全然伝わってこないですよ。

成績が5の生徒は「これでよし」、2の生徒は（3や4になるように）漠然と「頑張れ」というのではあまり意味がないじゃないですか。各自にいまの段階から次の段階に伸ばす具体的な目標や課題を示し、各人の実となる指導につなげていくのが健全な教育活動ではないでしょうか。すなわち、明確な学習目標や基準に照らし合わせた絶対評価を行ない、それに応じて個別指導を行なっていくことこそがどの生徒にとっても意義ある指導だと思うのです。

そして、そのような評価・指導を行なっていく際に、特に留意すべきことは、先生も生徒も、保護者も地域の人々も、『生徒はみな等しく価値のある大切な存在だ』という命題と、『生徒の能力はみな等しい』という命題がイコールではないことを共通の認識として持つことです。すなわち、皆が人間の多様な能力に価値を認め、各個人それぞれの良さを尊重できるように、成熟した人間観を持つということなんです。徒競走で全員を同時にゴールさせたり、絶対評価なら全員に5をつけるという発想にこそ、評価者の「足の遅い生徒は可哀想だ」「学習理解の遅い生徒は可哀想」という、能力や教育に対する固定した考えが露呈しているように思うのですが、いかがでしょうか。そういう指導では、却って努力することへの軽視が進み、また、到達レベルの高い生徒の誤った優越感、到達レベルの低い生徒の劣等感はそのまま放置され、改善されないことになるんじゃないですか。近年、子どもや若者の間では、「努力することは恥ずかしいことだ」とする風潮があるようなのですが、「到達レベルの高低を恥ずかしがる必要はない。努力し進歩することこそ素晴らしいことであり、努力を軽視し怠けることこそ恥ずべきことだ」という共通認識を、まず大人たちがしっかりと共有し、そういう学習環境を整えることが大切なんだと考えます。

さて、話を元に戻して、学校が変わる大きな変更点の5つ目は何かというと、それは「総合学習の時間」が導入されることです。

「ゆとりの中で生きる力を育む教育」といわれている新教育課程が、本来目指している教育を実りあるものにしていくために大きなポイントとなるのが、新たに導入される「総合的な学習の時間」をいかに有効な時間にするかに大きくかかっています。すなわち、その時間は、子供たちの知的好奇心や学問に対する興味、関心、そして、自分で問題を見つけ解決しながら学習活動を膨らましていく能力を培う学習活動を行っていくことを目的として設けられた時間に他ならないからです。

「アメリカで私の子供が通っている小学校の教育は、日本の教育とちょっと違っていてユニークなんです」と、米国の大学で働いている生理学の研究をしている知人が十二才の娘さんの体験をもとに話してくれたことがありました。

「例えば、小学校にも卒業論文みたいなものがあって、何人かでチームを組み、調べてみたい不思議なことについてみんなで協議して、まずテーマを決める。先生方に随時ナビゲートしてもらいながら、数ヶ月かけて、図書館や博物館を利用したり、インターネット

で調べたり、テーマによっては実験・観察なども自分達で工夫して行う。時には e メールを使って専門家に問い合わせたりもする(その際に手紙の書き方の指導もするということでした)。その後、調査した結果を論文の形にまとめ、適宜、先生や親がニーズに応じて図書館の利用の仕方やインターネットの利用の仕方なども教える。うちの娘は“舌の知覚のしくみ”について調べていましたが、興味、関心のおもむくままに、生物学の領域にとどまらず、物理、化学にいたるまで、親の私が知らない先端の話まで踏み込んで楽しそうにやっていましたよ。論文の発表会のようなものもあって、事前に先生がプレゼンテーションの仕方までキチンと指導する。小学生たちに学会さながらのことをやらせるんです。日本の多くで行われているような、たくさんの知識を教科書の字面を追いかけて覚えこませているだけの教育には、あまりメリットを感じませんね」と。

細かいことまで覚えても、その後、使わないものは年月の経過とともに忘れてしまうし、それに日進月歩の学問や変化の激しい実社会に、既存の事柄すべて覚えこんで対応させることは実際には不可能です。覚えさせることは皆が知っていなければ困る事柄に絞って繰り返し、徹底して理解させる。また、知識を教え込むというよりも自分の知らないこと、知りたいと思うことをどうやって調べていけばいいのか、自分の考えや学んだことをどんな風にまとめたら人に正しく伝えることができるのか・・・そういった学習の仕方を教え、自ら問題を見つけていく姿勢を身に付けさせていくべきで、あとは、科学の分野の不不思議や面白さ、社会が考えていかなければならない問題になるべくたくさん触れさせ、子どもたちの知的好奇心を存分に刺激することが大切なのではないのでしょうか。そうやって自己学習力を育むことの方が大切なのではないのでしょうか。こういった観点から、教科書を使って学習する時間ではない体験作業型の学習時間が設けられることになったというわけです。

このように、今年の4月から、学校のカリキュラムと違いますか学校が変わるわけですが、この変更に対して、賛否両論渦巻いております。賛成の人もたくさんいるし、反対の人もたくさんいる。そして、みな共通していることは将来の子どものことを考えて心配しているわけです。どういう方法がいいのだろうか。将来の子どもたちのためになるのは、どういう方法をとるのがいいのだろうか。どのように教えるのがいいのだろうか。でも、そのための方法論に関しての考え方の違いが、賛成か反対かに分かれるところなのですが、本日はできるだけ公平な立場から皆様に深く考えていただくために、まず、日本の今の子どもたちや若者たちの現状というものを大雑把ながらみなさんといっしょに思い起こしていただこうと思います。

○子どもたち・若者たちの意識

今の日本の子どもたちや若者を取り囲む環境が病んでいるということは、2001年12月頃に新聞で紹介されていた、日本教育文化研究所が発表したデータにも現れていました。日本と、韓国、フランス、アメリカの4カ国で、青少年(主に高校生)を対象に夢とか志に関して調査した結果が大変憂うべきものだったのです。「将来の社会は希望に満ちて、

明るい」と考えている若者は、日本では22%。他の3カ国、韓国、フランス、アメリカでは60%以上です。"未来をポジティブに捉えている青少年"の割合も、また、"未来に夢を抱いていて自分の力でそれを切り拓いていこうと考えている青少年"の割合も日本は他の3カ国に比べてグリーンと少ないんです。「大変なことは歯を食いしばってがんばって・・・」という若者も、日本だけは特に少ない。日本には、「努力なんて冗談じゃないよ。今日、この日が楽しければいい」なんてふうに考えている若者が多いんですね(笑)。だけど、よくよく考えてみれば、これは若者だけの現象じゃないでしょう？(日本の)大人たちだって同じですよ。「自分さえよければ」「他人にバレないようにうまくやればいいんだよ」という考え方をしている大人も多いじゃないですか？子どもがダメになったというけれど、大人の影響、大人がダメだから子どももそうなるのではないかと考えられませんか？大人の責任についてここで論じるのはやめて、先に進めますが、私の職場、東海大学教育開発研究所は東京の原宿や渋谷の近くにあるのですが、ちょっと前までは、ガングロ・ピアスの中・高校生たちがいっぱいたむろしていました。今は、流行が変わって、ガングロはほとんど消滅したようですが、あちこちから、いろいろな若者がやって来て、たむろしていることに変わりはありません。

渋谷の繁華街は援助交際とか麻薬とか余り芳しくないものが横行している場所でもあり、青少年が犯罪に巻き込まれやすい所として特に、心配されている地域です。彼女たち、彼らたちにインタビューする機会があるのですが、まず感じるのは「将来、どういうことをしたいの？何になりたいの？」と聞くと、そういうものがあまりないのです。パン屋さんになりたいとか役者さんになりたいとか、看護婦さんになってとか、そういう夢があれば、がんばっているんですよ。ところが、何にもないんです。さらに困ったことに、モラルも低下してしまっているんです。どういうふうに低下しているかという、たとえば、援助交際したという女子高校生は、「あんたに関係ないでしょ。あんたに、とやかく言われる筋合いはないわよ。相手のオヤジからもらった金でヴィトンのバックが買えたのよ。相手のオヤジも喜んでいたし私もこれ買えたんだから、いいじゃない。他人に迷惑かけているわけでもないんだし。」なんてことを言います。他人に迷惑かけてなければ何をやっても構わない(実際には、他の女子高校生もそういう目で見られてしまう等、間接的な迷惑はかけているんだと思うんですが)。そういうモラルの基準に成り下がってしまっているんですね。確かに、「他人に迷惑かけない」ということは、最低限のモラルの基準ですよ。けれども、日々若者たちが考えるべきことは「自分は、どうやったら多くの人を幸せにできるのだろうか」であって、朝起きたら「今日は何人の人のためになれるのだろうか」、「今日はどうやってみんなを喜ばせようかな。」こういうふうに若者たちや子どもたちが考えるような社会じゃなければ、良い社会とは言えないんです。それが、偏差値の高い難関大学に入ることが教育の一番の目標、人生の目標みたいな風潮(誰もそんなことを直接言ったことはないのだけれども、実際にはそうですね)がある。家の手伝いや、友達と遊ぶことや、興味のある本を読むことやボランティア活動に参加することよりも、中学や高校、大学に

入るための勉強に力を入れなさいという親が少なくないんです。一方、勉強したって、うちの子もはたかが知れているんだから、勉強なんかしなくてもいいと、放ったらかしてしまう親も多くなってきていて、極度に勉強を強いるか、あるいは全く放棄してしまうかの二極化が進んでいるといわれています。こんなふうに、勉強や知識だけが唯一の尺度みたいになっているのは、正しくありません。学校の成績が悪くたって、学歴が無くたって、一生懸命努力して、世のため人のために素晴らしいことをやっている大人たちはいっぱいいます。このことを軽視する社会は、人々にとってあまり住みやすい社会ではないと私は思っています。

それから、20年ぐらい前から指摘されている問題ですが、学校現場では相変わらずいじめとか、不登校とか校内暴力の問題も聞かれます。不登校は全国で13万4千人の数にもぼっているそうです。「学校は大切だからいきなさい」と叱咤激励して学校に送り出しても教室には一步も入らない、入れない、そして、保健室で一日過ごす、いわゆる保健室登校児といわれている子どももだんだん増えてきているのが現状です。

また、小学校や中学校などの朝礼で、校長先生が10分間ほどお話している間に貧血で倒れてしまう子どもが結構目につくようになったとか、朝方の1時間目に気分が悪くなって保健室に駆け込む人数も増加してきている等、体力も著しく低下してきています。そして、学級崩壊という言葉で称されるような、授業についていけなかったり、初めから授業中に勉強しようという気持ちがなくて、授業中勝手に教室を歩き回っていたり、平然とお喋りしていて授業が成立しない等の話もチラホラ耳にします。因みに、こういう現象は、小学校や中学校では割と最近に見られるようになってきたのだけど、大学はもっとずっと前から学級崩壊というのは始っていたのでは、と思います(笑)。授業中に入出入りする、代返なんて当たり前でお喋りしている、居眠りしている、授業なんか全然ついてこようとしない。そういう意欲の低下した、向上心のない大学生が目につくのは、全国に約670の大学があるのですが、その内のほとんどが、当たり前という状況にきています。すなわち、日本の高等教育のほうは、だいぶ前から荒廃しているのです。他国ではほとんど見られないけれども日本の大学では、こういった現象はほとんど当たり前と化していますよね。例えば、出席をとるなんていうのは、日本の大学の中には、1時間に対して2回も3回も出席をとる教授もいるくらいです。途中で抜け出したりするのがいますから、授業の最初と真ん中と最後の3回、出席をとるというわけです(笑)。それから、日本では、授業中にお喋りをすとか、試験の時にカンニングをすとかがほとんど当たり前ですが、他国の大学では、ほとんどこういう事はありません。だから試験監督もいないことがあります。試験というと、日本の大学では、教授と助手と事務の人まできて、3人で見張ったりするのが当たり前ですけどね。試験前になると、友達ノートを借りてコピーして、自分が出席しなかった授業の穴埋めをするなんてことも日本では当たり前だけど、そんなことは米国ではほとんど無いです。他人の日々の努力を一瞬にして自分のものにしてしまおうなんて、大変失礼なことではできないんだと、米国から日本にやってきたJ・パークランド教授がおっしゃ

っていました。それに、そんなやり方をしてもちゃんと自分の実力をつけることにならないではないかということなんだそうですね。日本とエラく違います。IQは高くてもモラルや社会性のない若者集団なんていうのは、ニュースで報道される成人式の若者たちの態度や姿勢にも現れていますね。日本では、大学生にもなって授業料や学費、そして生活費もみんな親が丸抱えして、「いい子だから何々大学へ行って、いい会社に就職して、お母さんやお父さんを安心させてね」という過保護な教育をしているんですね。海外の多くでは、高等教育を受けるならば自分でがんばるのが原則です。要するに自分で学費を稼いで、そして、自分で生活費を捻出する。夏休みになったら、何処かの工場に行って9月1日の科目登録日までの2ヶ月～3ヶ月間、額に汗して働いて稼ぎ、自分で自分に投資するわけです。こうでないからあまり本気にはならないのではないのですか、日本の学生は。そこまでして大学に進学して勉強する意味があるのか、大学で学ぶことによって自分にどんな実力をつけるのか真剣に考えていないんですよね。そういう環境がないんです。

○学力はどうか？

学校の様子、若者の生態とでもいうべきものがどうであるかということをお話しましたが、では学力のほうはどうでしょうか？

学力といっても定義はいろいろあるのですが、ひとつの目安になるものとしてOECDが行なった去年の調査結果があります。それによると、数学的リテラシー（素養）および科学的リテラシーの平均得点の国際比較で、調査国32カ国の中で日本の高校生は第1位ですよ。「最近の報道では、日本の子どもたち、若者たちの学力が下がっている。数学や科学の力が低下している」と言われているのですが、それでも先進32カ国の国際比較の結果では、日本の平均水準としての高校生たちの数学力、科学力は他国に比べても良いという結果が出ているわけです。

それから、「IEA国際学力比較にみる算数・数学の成績（中学校1、2年生対象）」に過去3回のデータが載っています。第1回目は1964年、東京オリンピックの年に調べていまして、参加国全12カ国中、イスラエルが1位で、日本は2位。3位がベルギーでした。第2回目の調査は1981年に行われていて、参加国が全部で20カ国になった時に日本は1位、そして、3回目が95年に行われていて、結果は、シンガポール1位、韓国2位に次いで3位が日本、4位香港という結果です。これをご覧になって皆さんはどう思われましたか？日本は2位→1位→3位と下がっているとおっしゃる方もいらっしゃいますが、上位で結構がんばっていると私は思います。昨年発表された第4回目の調査結果では5位でしたが、内容を見ると、日本の学力傾向はあまり変わってません。「計算などの典型問題の正答率が高いが、それに比べて普段なれていないタイプの問題、すなわち自分で考えなければならないタイプの応用問題の正答率は決してよくない」という傾向は一向に変わらないと。順位が下がってきた理由としては、首都圏の一部では塾通いがどんどん早期化して、幼稚園受験とか小学校受験とか、受験競争が低年齢化し激化している一方で、「うちの子は勉強なんかしなくていい」といって全く学業に関心を示さない家庭も

増えはじめているといった具合に、勉強する層としない層が二極化してきているという現象があるのではないか、また I E A の上位圏の中には学業成績のよい生徒のみを対象に試験を実施している国もあるが、日本は平均的な中学校を対象に実施しているからだ等の理由が指摘されています。こういう風にお話すると、「日本の教育は、学力を育むという点では、何の問題もないのではないか？カリキュラムを削減したり、総合学習なんていう新しい学習時間をわざわざ設ける必要があるのか？」と思われる方もいらっしゃるかもしれません。ですが、たとえば I E A が学力試験と同時に実施している数学や理科に対する意識調査の結果を見てください。日本は、小学校の時には 72% が「算数は楽しい」と感じているのですが、中学 2 年になると 46% にグリーンと下がってしまうんですね。ところがシンガポールは、確かに減少するという状況はありますけれども、それぞれ 92%、78% が算数や数学が好きだという割合が高いのです。アメリカも、85% から 75% と減り方が少なく、好きだというパーセンテージが高い。上の学年にいくと、内容が高度になるのに比例して、好きだという割合が減少するということは当然あるでしょうが、日本は「ドーン」と減ってきちゃうことが問題です。

数学でいい成績をとるのに必要なことは何かという問いに対して、日本では「教科書やノートの内容を覚えること」なんていうことが 92% なのです。92% が「公式や解法を覚えることだよ」と言っているのですけれども、シンガポールは 32% なのです。「数学は暗記したってしょうがないよ。思考力を鍛えることが大切なんだよ。」と、先生や研究者たちは言っているんですが。そして、「将来、数学を使う仕事に就きたいか」という問いに NO と答える生徒の割合も、他国に比べ、日本は韓国と並んでグリーンと高いのです。これらのデータを要約すると、平均学力はトップクラスにいる。だけれども、嫌いな人が多くて、そして、勉強の仕方も暗記したり、詰め込んだりということが多く、数学は生活で大切だと思っていない生徒の割合も世界で一番多い。好きでもない、役に立つとも思っていない、暗記すりゃいいと思っている、そういう勉強をして、まあまあ点数だけは良い、こういう状況です。好きでもないのに、何がトップクラスにしているのでしょうか？それは何でしょうか？みなさんきっと、体験的に分かっているかと思いますが、単に学歴を手に入れるため、入試・テストそういうもののために、必死になってやってるからというだけではないでしょうか。また、こんなデータもあります。OECD が先進十数カ国の一般市民（成人）に対して「科学技術について知識を持っている一般市民の割合」と「科学技術に関して関心を持っている一般市民の割合」を調査した結果があるのですが、日本の成人はビリかブービーでワーストレベルなんです。日本の 18 才までの学力テストの結果はトップレベルだというのに、結局、学校であれだけ勉強させられても、科学でも文学でも、また、数学でも歴史でも語学でも、それらに対しての知的好奇心が育まれてないということが、様々な結果に現れているのです。また、読書しない高校生や大学生の割合も、日本は他国に比べてとても高い。「こんなことについて、もっと深く知りたい」「この著者がどんなことを考えている人なのか知りたい」というような関心や好奇心が無いということなの

か、本を読む楽しさや習慣が無いということなのか。アメリカの大学では、沢山の本を読んだうえで望まなければならない講義が珍しくありません。本を読みながら、ものごとを様々な方向から深く考える習慣が身につけられていないということの現れなのでしょう。

「できるようにさせよう」と日本の教育では、あれも、これも、ドンドン教え込んできました。数学では、2次方程式の解の公式も、ピタゴラスの定理も数列も微分積分も、たくさんを教え込んだ。だけど、皆さん、大人の方々は、習ったことをほとんど覚えていないというのが現実じゃないんですか(笑)。たくさんたくさん習うんです。英語でも、分詞構文、仮定法、五文型などこんなにいっぱい習っていて、でも、実力はどの位か？たとえば、英語の実力を試すために、TOEFLというアメリカの大学に留学するための語学力を測る試験があります。その試験の日本人の平均点が、アジア23カ国中何位かご存知ですか？日本はこれだけ英語教育やっているんですが、22位なんです。教え方や、やり方に問題があるんじゃないでしょうか？

こういう現状を考えると、徳・体の面だけでなく知の面でも、「日本の小・中・高校生の学力調査の結果は高いのだから、日本の教育は素晴らしいのだ」と簡単に結論づけることはできないのではないかと思うのです。

○知育に関してこれまでの教育の何が問題だったのか

少し前に、TVで大前研一さんが次のようなことを話していました。「毎年、新聞に載るセンターテストの問題を自分でも解いてみるのだけど、近年は、私たちの時代では問われなかったような難しい内容のものも出題されており、今の学生はそれをこなしている。しかし、その一方で、初歩的な計算ができないとか漢字が書けないとか、そういった学力低下の問題が持ち上がってきている。つまり、今の若者、子供たちは我々が学力と考えているような能力はないが、難しいテストに答える能力はあるという、いびつな能力だけを突出させているのじゃないか」と。

知的好奇心や自己学習力が育まれていないこと、学んだはずの知識の定着率が悪いこと、これらの原因は一体何なのでしょう。当然、いろいろな要因が複合的に絡み合っただけなのでしょうが、その主原因の一つは長年、指摘されてきたように小学校の段階から高校に至るまで、たくさんの知識を覚え覚えこんだり、テスト問題の解法パターンを反復練習するだけの学習という受身的学習に終始していることにあると考えます。カリキュラムの量が云々、入試が易くなっているということも問題ですが、まず、子供たちに与える学習の質の悪さを改めることが急務だと思います。そして、後程触れさせて頂きますが、この現象はテストを中心に据えて行ってきた教育の限界なのではないかと考えます。

「我々は死に至る学校をよく知っている。"死せる言葉"でもって得々とすることを名誉とし、完璧な文法、完璧な学習のみを理想として、人々の生活や心を見捨てた学校で学んでも、結果としてそれが自分のためにほとんど役に立たなかったことを我々は経験的に知っている。たとえ天使が書いた文章であっても、それは読み手の生活に溶け込めるものでない限りすべて死んだものである。生徒と教え手が"生きた言葉"で語り合い触れ合う教育

が理想の教育だ。」

これは、今から百年位前に、デンマークの国民高等学校を創始し、"生きた教育"の実践によって国を蘇らせることに成功したグルントビー博士の言葉です。

子どもや若者に限らず、その親の世代の間人であっても、"学校で、なぜ数学を学ぶのか、なぜ物理を学ぶのか、なぜ歴史を学ぶのか?"と問われたとき、それらを学ぶ意義を確信をもって答えられる人は少ないでしょう。そうでありながらも親の世代の方が学習態度がよく、学習意欲が高い生徒が多かったというのは、"学校で良い成績を修めてより良い収入を得られる職について安定した生活を送ろう"という価値観が主流を占めていたこともひとつの要因ではないでしょうか。学校で教える事柄がどのような理由で大切なのか、また将来どんな場面でそれらを役立てることができるのか、といった内容まで踏み込まずに、次から次に教科書に書かれている知識を表面的になぞって、それらを覚えさせて終わりとしてきた授業の在り方は、"生きた教育"と言えるのでしょうか。高校までに学んだはずの知識の定着率が悪い大学生が増加しているというのも、結局、テストのためだけの、その場凌ぎの勉強でやり過ごしてきたからこういう現象が起きたと考えるのが妥当なのではないでしょうか。"なぜ分母の違う分数どうしを足し算するときに通分しなければいけないのか"といった本質には余り触れないで、「これらはこうすればいいんだよ」と機械的に操作だけ頭にインプットして通りすぎているから、こういうことが起こるのではないのでしょうか。また、それを学ぶことが自分の人生、生活の中でどのように役立つのか、どのような面白いことに繋がっていくのかをキチッと伝えてこなかったことにも原因があるのではないのでしょうか。すなわち、『好奇心を植え付け、自分の頭で考え、納得し、感動する』という本当の学力を身に付けさせるための教育をしてこなかったことの一つの現れなのだと思います。

また、「与えられた問題しか解けない」、「言われたことしかやれない、やらなやらない」昨今の若者に対してこういった現象が度々指摘されますが、こういった"自己学習力の低下"現象については、知育であれ、徳育であれ、子供たちが受身的にならずに、自分で実際に取り組み、試行錯誤しながら工夫し考察を深め、何でもシッカリと身に付けていくという練習をさせることが重要だと考えます。大人たちが何でも手っ取り早く正解や解法マニュアルや「こうしたらダメだ」という頭ごなしの規則を教え、「素早くその通りにやりなさい。その通りにやらずにグズグズしている者は失格だ」と画一的な減点方式で縛り、子供たちを大人の敷いたルールの上しか走れなくしてきたことへの反省をしなければならないでしょう。

今までの教育には、『沢山のことを教え込もうとするあまり、どちらかというと、暗記させてしまったり、わかったつもりにさせるだけで、"知らなかったことをひとつずつじっくり考えて自分の頭で納得させる"という発見的な教授法がなされていなかったこと』と、『解法がわかっている、その通りやれば答がそのまま出てくるようなもの（マニュアル通りに行う練習）を主に取り組ませ、創意工夫し、時に失敗したりしながら自分が主体的に疑問やアイデアを抱きながら取り組む練習をさせてこなかったこと』に大きな問題があると

考えています。そして、これらを今後、改善することこそが、これからの教育に求められていることだと思います。

日本のこれまでの学校、授業の在り方はどうだったといえるのでしょうか？多くの子どもたちが、「どうしてこんなことを勉強しなくちゃいけないの？」、「これを知っていることが大人になったときに何の意味があるの？」という疑問を抱いているのですが、大人たちは、「試験や進学するために必要なんだ」「とにかく頑張れ、テストでいい点を取るために」ということぐらいの説明しかしないのです。

大学に入るまで何の目的かわからぬままただやたら忙しく詰め込まれ、多くの人がその後の人生であまり役に立ったことがないと感じるような教育に固執し続けていけば、やはり学校は死に至ってしまうのではないのでしょうか？

遠藤周作さんも、こんな言葉を遺されています。

「自分の経験から、受験のための教育がどんなに意味がないか私は知っている。そうだったのは、親にちゃんとした教育観がなくなったからだ。教育観とは、親が持つ人間の幸福感のことである。」

「親が」という箇所を、「大人が」というふうに直してもいいでしょうし、「社会が」に直しても成立する言葉ではないのでしょうか？

昨今、凶悪な事件や、社会的に大きな影響を与える不祥事として新聞やテレビ等を賑わせている事件の主役（被告）を思い浮かべてみて下さい。事件の背景として、数十年前は、「無知なるが故、恐ろしいことをしてかしてしまった」とか「育った境遇が不遇なゆえ」といった理由が挙げられていたんですけども、最近の事件は、そうではないんです。最近の加害者は、学校ではとてもいい成績であるとか、全国模試の偏差値が高いとか、高学歴で社会的地位や名誉もある等、日本の教育で「優秀」とされている人が少なくないんです。バブルが崩壊した辺りから起きた、マスコミの耳目を引いた大きな事件の主役のプロフィールを考えてみてください。HIV 訴訟の時の血友病の日本の権威や厚生官僚、昨今話題の外務官僚たち、機長を殺害したハイジャック犯、巨額の不償を生んだ某デパートの社長、数々の事件を引き起こしたオウム幹部たち、狂牛病の対策を怠った農水官僚・・・次々と浮かんでいきますね。そういう方々は、十分な教育を受けられる環境になかったが故にあの様に大きな、人々を不幸にするような事件を起こしてしまったのでは無いんです。大変立派な学歴も持っていらっしゃる。そして人も羨むような名誉も地位も財産もある。日本の最高レベルとされている教育を受けたエリート達なのです。ところが、そういう人が、人の心の痛みや社会的な責任等を総合的に深く考えることができなかつたのです。全ての事件が「意図的に」行なわれたとは思いたくないし、そうでないと信じていますが、結果的に多くの人々を不幸にしまいました。こういう事件がここ十年位の間、毎年後を絶たない。たとえば、米国のエリート達の多くが体験しているという多くの寄宿生の学校では、次のような教育をしているそうです。まず、公正であることが徹底され、他人のいじめ等の不正行為を見て見ぬふりをしただけで即退学となる。人を陥れる行為、悪口なども当然御法

度。そして、ボランティア、社会貢献が盛んに推奨され、社会を直に見ることで、「法律、政治、サイエンス等々自分をもっと勉強して人の役に立つ人間にならなくては」という意識を育てる。こうして、まず一人の人間としてのあり方を深く問うわけです。その上で、研究者、学者を招いての講演、書物等を通じて知的好奇心を大いに喚起する。また、将来リーダーになる人間なら多くの人との共通の話題をたくさん持っている人物であればと、芸術、映画といった講義も用意され推奨されている。こうして、大学入試のためだけという陳腐な動機でなく、自分の真の実力をつけるために、豊富に用意された科目から自発的に幅広く選択して意欲的に学んでいく。こういった逞しい鍛えられ方をしているのだそうです。ノルマで縛るのでなく生徒たちの心に灯をつけ意欲を掻き立て自らを自らの力で鍛えさせていく。豊かな時代に見合った教育の在り方というものを一考させられるモデルではないでしょうか。そういったことを全部思い浮かべながら、日本の教育において欠けているものは何なのか、大切にしなければならないものは何なのかということ、もう一度原点から考え直さなければならないと思います。そして、「どういう教育が良い教育なのか」、「学校というのはどういう場所であるべきか」、「学校だけでは担えない部分はどう補っていくのか」ということを考えなければならないのです。

いまから10年前位にアメリカでベストセラーになった「人生に必要な知恵は、全て幼稚園の砂場で学んだ」(ロバート・フルガム著)という本があるのですが、その本の中に、こんな一節があります。

『人間がどう生きるか、どのように振る舞いどんな気持ちで日々を送ればいいのか、本当に知っていなくてはならないことを私は、全部、残らず幼稚園で教わった。人生の知恵は、大学という山のてっぺんにあるのではなく、幼稚園の砂場に埋まっていたのである。私はそこで、何を学んだだろうか。何でもみんなで分け合うこと、ずるをしないこと、人をぶたないこと、人のものには手を出さないこと、誰かを傷つけてしまったらゴメンナサイと言うこと、不思議だなと思う気持ちを大切にすること。』

これを読むと、世の中から怒りを買ったエリート達は幼稚園を卒業していなかったのか(笑)と思ってしまうよね。「勉強が大切なんだ。なんだかんだ言たって、勉強していい高校、いい大学に入らなければ惨めな人生になるんだ。子どもにとって一番大切なのは勉強(学業)なんだ。」と言う人も少なくありません。土曜日が休みになったら、塾や予備校に行かせるんだと考えている親も少なくないようです。勉強は大切だし、進学に力を入れるもの大切なことではありますけれど、単に入試やテスト対策、"傾向と対策"に力を入れるというのであれば、入試はパスするかもしれないけれど、それではあまり意味がないということは、立花隆さんの『東大生はバカになったか』等の大学生の学力低下の話や、企業が学歴でなく実力で学生を採用するようになってきたこと等からも多くの方が分かっているはずです。今までのように、"学歴があれば良い企業に採用してもらって一生雇ってもらえる"という図式や、"一旦、大学に入ってしまったら、大した勉強しなくたって卒業できる"という図式があれば、それでもよかったかもしれないけれど、その構図が崩れていて、

実力が求められる時代になってきているんです。「就職する（学歴を手に入れる）ための大学入試」「偏差値の高い大学に入るための高校や中学入試」そうやって、学業、勉強というものが試験対策中心になってしまってきているんです。しかも、そういう勉強が小学校高学年ぐらいから始まってきていた。どういう能力を身につけるべきなのか、もう一度シッカリ見直して学習活動を行なっていかなければ、大前研一さんの言う"いびつな能力だけを突出させるだけ"のままではないですか。グルントビーの言う、「そこで学んだことが将来自分のため（実力）にはならない死に至る学校」ではないですか。

○理想の学校って何だろう？

教育に関する3人の方々の言葉を紹介しましたがけれども、皆さんは学校ってどういう機関であるべきだと思いますか？

私が、満たすべきだと考える学校の条件は主に次のことです。

まず、1番目は、学校って子どもたちに夢と希望と志を培うところであるべきだということです。夢や希望、志のでかさ、こういったものが大切だと思うんです。余談になりますが、「赤毛のアン」という小説の主人公のアンは、後に学校の先生になるんですけど、彼女は初めて学校に赴任する際に「私は生徒たち一人一人の心に希望の灯を点すのよ」と心の中で誓ってますね。また、北大の庭に銅像が立っているウィリアム・S・クラーク博士、彼は、札幌農学校にたった8ヶ月しかいなかったんですけど、日本の思想界を牛耳った新渡戸稲造とか内村鑑三とか宮部金吾といった、キラ星のような学者や思想家を育てたんです。クラーク博士は日本を去る際に「Boys, be ambitious!」この有名な言葉を残していったのですが、一般にこの言葉は「少年よ大志を抱け!」って訳されているけど、実は、「君たち!もっと元気出せよ!」というニュアンスだったのかも知れません。今の日本にもこの言葉は必要だと思うんですが、「もっと元気出して、生き甲斐の感じられることをやろうよ」こういうことだと思うんです。そして、子どもたちに大志を抱かせたいのなら、どうせダメだとはじめから諦めたりしないで、親・大人、先生がまず自ら大きな夢を抱き、いろんなものに挑戦していく。学校というところは夢・希望・志、こういうものを培う場所である。

2番目は努力することの大切さに気づかせ、やればできるんだという自信を培う場所であること。学校は、子どもたちにとって自信をつける場になっているのか、このことを改めて、問い正したいです。むしろその反対で、自信を喪失する場、すなわち「俺はだめな人間なんだ。できねえんだ。馬鹿なんだ」こういう場所になってしまっていないでしょうか?こういう環境になってしまっているから、子どもたちや若者の多くが夢も生き甲斐も抱いていないのではないですか?「努力したって空しい。ダメなのは、ダメなんだ。」こういうふうにさせてしまっている学校があるとしたら、それは、大いに改めるべきだと思います。努力すれば、きっといつかはできるんだ。それはすぐには、できないかもしれないですよ。短期的に見れば、努力は到底報われそうに思えないということは旺々にしてある。だけれどもずーとやっていけば、いつかは何とかできるんだという努力の大切さや自信

を体感させることが重要なのではないですか？たとえば、私事で恐縮ですが、「私は数学を仕事にしています」と言うと「やあ、頭がいいんですね。」と言われます。そうじゃないんです、頭のよし悪しじゃなくて、ただひたすら努力したのです。以前、高校の時の同窓会があって、会が終わった後、友人の K 君の家にみんなで流れていったときの出来事です。その家に行くと、K 君のお母さんが出てきて、「あら、秋山君、数学者なんですって。うちの K も数学をやれば良かったのよね。あの成績の悪かった秋山君だってこれだけやってるんだから、K ならノーベル賞とれたんじゃない」なんて言うんですよ(笑)。18 才の時の学力がなんぼのもんじゃって言いたかったですよ。18 才の時点では、確かに K 君の方が数学の成績はずっと良かったかもしれない。だけど、私はその後 30 年以上も数学と格闘し続けてきたんです。18 才の時の学力の差より、ひたすら格闘し続けたか否かの 30 年以上の月日のほうがはるかに大きな意味のある差だと思いますが、違いますか？それを日本では、まだ多くの人がわかってくれない。18 才の時の学力、出身大学で人の能力を判断するところがまだあるように思います。

「英語が出来るからあいつは、頭がいいな。」とか言う。そうじゃないんです。ちゃんと地道に勉強しているからなんです。やり続けなければ、ドンドン忘れて、できなくなっちゃうんです。そのことを教えるべきなんです。子どもたちや若者には、努力の大切さ、尊さ、その絶大なる効果、これをきちんと若いうちに教えることが大切だと私は思っているんです。

3 番目は、たくさんの感動の体験を与えて、学問の面白さを伝える場所であること。「算数ってこんなおもしろいのか。この考え方をすると、こんなにいろんなことができるようになるのか」そういう醍醐味を伝えることが一番大切です。「僕は、みんなが 7 段飛べる跳び箱が、5 段しか飛べないけれども、みんなで体育館走り回るの楽しい。体を動かすのってたのしい」と。これを教えられたら体育の先生、立派です。「ぼくは、音痴であんまり上手くお歌を歌えないけど、みんなといっしょに合唱したり、楽器の練習したり、好きな曲、サンタルチアが弾けるようになったら嬉しい」と。こんなふうに生徒が感じられるようになったら音楽の先生は満点です。後は「好きこそ物の上手なれ」の例えのごとく、放っておいたら子どもたちは自力でやっていくんですよ。「昨今の若者はダメになった。バカになった」なんて声を聞く機会が多いのですけれど、能力が低下しているとは思いません。というのはですね、原宿にいるガングロ・ピアスのお姉さんたちや地ベタに座っているお兄さんたちは、数学になんか関心がありません。行動を見ていけば、それは分かります(笑)。「数学なんてダサイ」こういう感じです(笑)。でも、彼氏にメールを送る時のあの素早さ(笑)。もう、何百ワードのメールをパッパッパッ送ります。私なんか到底かなわない(笑)。ひらがなを適宜漢字に変換したり、絵文字や記号を挿入したり、入力ルールをちゃんとマスターしてパッパカ、パッパカと抽象的な作業をやっているのけてるわけです。あの作業は"カッコの前にマイナスの記号がついていたら、カッコの中味の符号を変えてカッコをはずす"とか"この 2 次方程式はどうやって解く"といった計算よりずっと複雑です(笑)。それを瞬時のも

とに理解してやっつけのけるぐらいの能力を持っている。すなわち、能力がないのではなく、勉強には全く関心がないというだけなのです。では、勉強を嫌いにさせたのは誰のせいかな。学校の先生や親などの大人の変な教育観が、子どもたちを勉強嫌いやインテリジェンス離れに追い込んだのではないかな。勉強の醍醐味やおもしろさというものを、子どもたちに存分に伝える場であることが、学校の条件のひとつであるはずですよ。

4つ目は、自分だけ幸せになることを考えるのではなく、自分のほかに他人もいて、他人を幸せにすることが、ひいては、自分も幸せになることにつながるんだという当たり前のこと、この自明の理に気づかせる場であることが、学校の重要な役割だと思います。すなわち、礼儀、作法、思いやり、優しさ、責任感、勇気、・・・を教えることも大切です。

5つ目は、ちょっとネガティブなことですが、失敗を体験する場であることです。苦しいこと、イヤなこと、嫌いなこと、こういうものが、たくさん世の中にはある。そして、うまくいかずに失敗することだって生きていれば何度も何度もあるんです。その時に、我慢の大切さや簡単に諦めちゃったり絶望するのではなくて、キチンと失敗を分析して次の一歩を踏み出す（こういう能力は"自己修正力"と呼ばれているようですが）練習をする場であることが学校に求められると思うのです。ところが実際には、"転ばぬ先の杖"と、子どもたちに失敗させないように、させないようにしている。この気遣いが（笑）却って、子どもたちから逞しく生きていく力を奪っているのではないのでしょうか？学校の役割はまだまだたくさんありましょすが、今、思いつくことを5つだけお話いたしました。皆さんは学校がどういう場であるべきだとお考えになっておられますか？

○授業をどのように変えていくべきか

それでは、学校をどのように変えていくべきか、授業をどう変えていくべきかということについて私見を述べさせていただきます。

まず、「子どもたちに勉強を出来るようにさせよう」という思いを少し譲っていただき、「勉強を好きにさせよう」、すなわち「出来るようにする」から「好きにする」への改革をする、これが1番目。

2番目は生徒参加型の授業にしよう。今までは学校の授業というと、小学校から大学まで教師独演型の授業が主だったんです。先生ががんばって、先生が肝心なことをやってしまっていた。だけど、それでは生徒に自主性が育たない、自分で考える習慣がつかないのです。これまで、授業で45分とか50分の授業中、一番がんばっているのは何てったって、先生でした。先生が演じ手で、生徒はリラックスした観客だったのです。日本は明治以来、教師独演型の授業を一斉に展開してきたのです。教室の授業の主役は生徒、児童なのです。それから、日本では失敗をしたら恥になるといった雰囲気があるんです。学校や教室の中というのは、たくさん間違えてもいいはずなんです。社会に出たら間違いはそれほど許されないけども、学校では、間違えながら進歩していく場所のはずですよ。ところが「間違えちゃダメ!」、答えを聞いて「それは間違いだ」と先生が冷たく言い放つんですね（笑）、日本では。でも、アメリカなどでは生徒が間違ったことを言うと、「Nice try（ナイ

ストライイ=いい試み)」こう言います。ダメとはあまり言わないんです。逆にエンカレッジするんです。「Another try. (別のアイデアを出してごらん)」などと言って、他の意見が出てくるようにさせるんです。ここらへんにも教育方針の違いがみえます。決して子どもたちを否定しない。「間違ってもいいんだよ。どんどん間違えることが進歩のもとだ。」こうやって子どもたちを育てているんですね。「教師独演型の授業を廃し、生徒参加型にしよう」これが2番目の改革です。

3番目は今までやってきた知識注入、天下り型の授業をやめて、作業体験・納得型の授業にしようということです。高校に受かるためだけの数学の勉強をやっても、喉元過ぎればみんな忘れる。毎年一月、大学入試のセンターテストがあります。18才の時にみんないっぱい難しいことを知っていますよ。でも、センターテストで合計650点取った人が一年後に500点も取れないそうです。同じ試験問題をやらせてもですよ。こんな定着率の悪い教育をして何になるのでしょうか。やっぱり人生において、学校で学んだことがちゃんと将来的にも使えるように、彼らの人生の血肉になるような教育をしなければならない。

だから知識注入、教え込み型の教育を廃して、作業体験納得型の授業にする。「なるほど」「そうだったのか」と実感できて、卒業後も、「ああ、学校で学んだことが役に立ってるな」と思えるような教育にしていかななくてはいけない。たとえば、2002年4月から総合学習という新しい形態の授業が始まりますが、「子どもの興味関心に基づいた体験的、作業的学習活動、そんな授業なんていうのはきっとできない。」やる前から批判的な声も聞かれます。4月になったら、施行されるのだから、私たちは、「どうやったら総合学習が実りあるものになるか」という方策について考えて、こうすれば成功するという具体的な提言をしていくことの方が大切。「ダメだ。ダメだ。ダメだ。」というだけの意見を出しても、子どもたちのためにはならないからです。学び甲斐のある課題はどういうものか、また、生徒のどんな能力をどういうことを調べさせたら引き出せるのかということを経験者たちが考え、準備しておく必要があります。あと2~3ヶ月で実施されるのですよ。その間に、自分たちもやったことがない、習ったこともない授業をどうすれば実り豊かなものにできるかの対策を講じていかななくてはならないんです。日本では初めてのものですが、アメリカへ行けば、手本になるものがいっぱいあります。ポートフォリオ学習とかプロジェクト学習と呼ばれているものが、そうです。そういうものをどんどん勉強する研究集会を自発的にやっていくべきではないでしょうか。今までと違う教育をやるということは、先生の力量が問われることになります。今までは、先生には大変失礼な言い方ですけど、ある意味で、先生はティーチング・マシーンだったのです。これからはそうではいけません。なぜ先生の力量が問われることになるかというと、総合学習には教科書がなく、教科書の通り進めればよいというものではないからです。そして、地元の人々、地域の人々、あるいは専門家の応援がなくしてはできません。「なんとなく体験して終わり」そういう時間になってしまったら困ります。この時間を有意義なものにできるか否かは非常に大きな意味を持つのです。今まで、一斉授業というものを日本ではずっとやってきましたが、これでやってこ

れたという点で日本は、世界ではたぐいまれな国だったのです。何十人もの生徒に対して一人の先生で対応していたのです。これは、本当に難しいことですよね。だって、子どもひとりずつによって、能力が違うのですから。 $aX^2 + bX + c = 0$ の解の公式を教えるといったって、ある子どもは「分数の計算、小学校6年で習ったはずのことからわからない。」とか、ある子どもは、「定数と変数の違いがわからない。すなわち、 a というのは定数で、 X というのはいろいろな値を変える変数だということが分からない。」とか、ある子どもは、「(中学3年の)平方完成というところで引っかかってしまってわからない」等々、わからないにしても、いろいろなレベルがあるんです。その一人ずつの能力を先生が把握して授業をすすめるのが本来求められていたことなのです。でも、実際はどうだったのでしょうか。あの子は、あまりよくわかっていない、この子は、もう理解できているくらいのはわかっていたでしょうが、何処あたりからつまづいているのか。なぜ、勉強が嫌いになったのか。そういったことを把握して授業を行っていたのでしょうか？つまづいている生徒はそのまま置いてきぼり、早く理解しちゃって退屈している生徒も放ったらかし、こんな感じではなかったですか？そうであったとするのなら、それは一人ずつの子どもを大切にした教育といえたのでしょうか。個を尊重して、どの子どもも自分に目が向けられていると感じられる教育環境の中で、大きな夢と志を抱けるように心に希望の灯を点していく。さっき学校の役割について5つのことを申し上げましたけれども、そういうことができるようにするための教育を展開すべきだと言いたいのです。

そのためには、子どもは社会の宝だということを皆が思い起こす必要があります。社会の宝である子どもの教育をこれまで学校だけに押し付けようとしたりしてきたのではないですか？地域や家庭も協力してみんなで育てるということがやっぱり大切なのです。これからは、地域の人々の協力、専門家の協力、いろいろな人が手を合わせて育てていきましょう。よその子どもが悪いことしてたら、ちゃんと誰か見ていた人が叱るんです。それが、他人の子どもだから、電車の中でお行儀が悪くても叱らないといった世の中になってしまった。だからおかしくなったんだ。全国各地の成人式の醜態だって起こるべくして起こったと思います。4月から始まる今回の教育課程で、時間数や通常の教科のカリキュラムを削減した真の目的は、教育の質の向上のためでなければなりません。たとえば、命の大切さを教えるために「命は大切だ。命は大切だ」と100回云わせてみたところで、あまり効果はありません。それよりも、動物を育てながら生死に触れたり、実際に医療の現場や人命救助をしている人々のところに行って、人の命を守るために、いかに多くの人が自分の危険も顧みずに必死になっているのかといった様子を目の当たりにすることも大切なのではないですか。本を読ませるだけの教育の方が時間も費用も効率的でしょう。でも、そんなの安っぽい教育です。手間暇かかったって、何かを実感できる教育をしていくことが求められているんです。百科事典を持ってきて、これが北極星、これがオリオン座、これがカシオペア座って教え込もうとするよりも満天の星の降るような山に連れて行って、夜空の星を見ながら、「ああ、あの星は何だろう」、「あの星は地球からどれくらい遠くにあるだろう」

こういった疑問をもたせたうえで、必要なものを教えるということが大切なのではないのでしょうか？そうしてこそ、第2の毛利さんや若田さんや向井さんが出てくると思います。すなわち、素晴らしさをたくさん教える、感動を伝えることがまず第一に大切なのです。数学も「わかった」「工夫したらできた」という喜びを体験させるべきです。そのためには生徒の反応をジックリ待つことも必要です。生徒の反応なんてお構いなしに「まだできないの」って言って先生は教えちゃうんです。一方、親にも問題があります。生徒の反応を待って行なう授業を先生がやっていると、なかなか進まないの、そうすると保護者が怒って、「うちの子どもの担任はダメ」だと校長室行って「あの担任、替えてください」なんてことをしている(笑)。本当に子どもたちに学問のおもしろさを伝えたい、感動を伝えたいと思っている先生をただ「受験のためにはならないから」ということで、「ダメダメ」といっているのは、親の人生観が問題なんだと、遠藤周作さんは言っていましたよね。教育観とは、親の持つ人間の幸福感だとも。

○宮沢賢治の授業

いろいろと理想の教育について愚見を申ししてきましたが、そんなことができるのかとお思いの方もいらっしゃるかと思います。ところが、こういった教育を実践していた人が日本にもたくさんいたのです。みんなが知っている人の中にもいるのです。あの「雨ニモ負ケズ・・・」で有名な宮沢賢治もその一人です。この人はたった5年しか教壇に立っていませんでした。25歳から29歳までの5年間、岩手の花巻農学校の教壇に立っていました。1996年は宮沢賢治の生誕百周年に当たる年で、その年には様々なメディアが賢治の作品を始め、彼の人柄や人生を紹介しました。それらの中で私が特に印象に残ったことは、畑山博氏の本「教師宮沢賢治のしごと」(小学館)にある、賢治の70歳を超えた教え子による次の証言でした。

「他の先生も一生懸命教えてくださったと思いますが、教科書を丁寧に読んだり、板書をノートに写させられたただけだったので、そういう授業で習ったことはすぐに忘れてしまいました。そういう授業は、勉強する時だけやけに忙しいのですが、卒業するとすっかり忘れて何の役にも立たない抜け殻の学問だったのですね。でも、賢治先生が授業で教えてくれたことは、60年近く経った今でもハッキリ覚えています」

そして、当時賢治先生が授業で何をどのように教えたのかをその教え子は再現して見せるのです。当時の花巻農学校は、乙種の2年生農学校で、同地区には盛岡と水沢に甲種の3年生農学校が、さらにその上には県立の中学や師範学校もあったそうです。すなわち、賢治先生のいた学校は、どちらかというと勉強することにあまり関心を抱いてない生徒の方が多かったのです。そのような生徒たちを引きつけ、彼らに"60年近くたってもハッキリ覚えている"といわせしめた賢治の授業がどのようなものであったのでしょうか。

○賢治先生の授業風景

これからお話することは、前述の畑山氏の著書に書かれていることです

まず、最初の授業で賢治先生は授業を受けるにあたって守るべき3つのルールを挙げた

そうです。

- (1) 先生の話を一息懸命聞いてくれ
- (2) 教科書は開かなくていい
- (3) 頭で覚えるのではなく、身体全体で覚えること

そのかわり大事なことは身体に染み込むまで何回でも教えるから。

特に(3)については、賢治先生は常に次のように語っていたといいます。「頭で覚えず、いつでも身体で覚えなさい。すると、知識に感動できるのですよ。詰め込みでは何も理解できません。ただ感動してください」と。

賢治先生の授業、教え方の特徴は、まず第一に

「賢治先生は目で見えるように教えてくれた(身のまわりの事柄と結びつけて教えてくれた)」と生徒たちが証言しています。

生徒の証言その(1)

例えば、「農作物の肥料として、窒素が重要」という事実を教える際に、賢治先生は次のように教えたといいます。

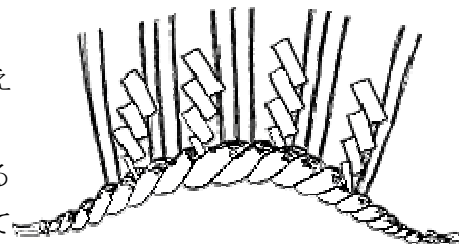
「皆さん、神社などでよく見かけるしめ縄が何を意味しているのかを知っていますか？太いしめ縄の本体は雲、細かく下がっている藁は雨、ギザギザの紙は稲妻を表しているのです。なぜ、しめ縄が神社に奉納されているのかというと、それは豊かな実りを祈るためです。なぜなら、雨と雲と雷は豊作のために不可欠なのです。雲のあるところに雷が発生する。雷が空中の窒素を分解し、それを雨が地中に溶かし込むと、その土地は栄養分豊かな土地になるのです。すなわち、窒素は作物にとって重要な栄養素なのです。それでは、今からこのことを自分自身の目で確かめるために、皆で雷のよく落ちる名所である変電所に行きましょう」。こういって、賢治は変電所に実際に生徒たちを連れて行き、「変電所の周りの田んぼには、今まで一度も肥料をやったことがないそうです。にもかかわらず、ここの稲はこのように穂もたわわに実り、肥料をやっているほかの田んぼの稲よりずっとたくさん収穫量があるのです。この事実は先ほど私が言ったことの裏付けになっています。窒素の重要性がわかりましたか」。

こうして、自分の話が確かであることを、生徒たちの目で確認させたのです。

賢治先生は「しめ縄」という身近なものに注目し、自然現象のカラクリを解き明かし、それを自分自身の目で確かめさせ、教科書に「窒素は肥料の重大な要素のひとつ」とだけ書かれている事実を、生徒の頭の髓から納得させることに成功したのです。

生徒の証言その(2)

「堀籠先生はとてもいい先生でした。堀籠先生は教科書に書かれていることを、端からほんとうに細かく、丁寧に説明してくれたのです。で、それだから、そのころに習ったこ



とは私は全部忘れまして。

たとえば、阿部、堀籠先生たちは、授業の始め30分を掛けて黒板にびっしり字を書いてそれらをノートに写させるのです。そうして後半はそれをちょっちょつと詳しくして読んで終わりなのです。60年もたつと、そういう授業は全部忘れてしまいます。勉強するときだけやけに忙しくて、でも卒業するとすっかり忘れて、何の仕事の役にも立たない抜け殻の学問だったのです。でも、賢治先生の授業は違うのです。たとえば、酸性土壌というのを教えてくれるとしましょうか。すると、先生はこう言うのです。

"酸性土壌かどうかは、まず見れば、スギナ、ジシバリが多く生えるのですぐわかる。見つけたら消石灰をやって土をなだめなければいけない"

目で見えるように先生は教えるのです。で、目に見えるものほど実生活で役立つのです。」

生徒たちがなぜ賢治先生の授業に関心を抱き、教わった内容を生涯忘れなかったのか、その主たる理由は賢治先生の授業はまさに生徒に学ぶ楽しさを身体一杯体感させる授業だったからでしょう。賢治先生の授業は、身の回りの不思議・疑問を提示し、生徒に「なぜだろう」と思わせ、生徒の好奇心を引き出すことから始まります。そして、あたかも推理小説を読んでいるかの如き流れで科学的に推論を展開し、教えたいと思う重要事項を提示するのです。そのうえで、身の回りの実例で生徒自身に検証させます。このようにして授業にストーリー性を持たせ、生徒に「ウーン、なるほど」と膝を叩いて納得させる教授法を取っていたのです。

たくさんの知識をどんどんインプットする教育でなく、こういった、子供の頭を耕す教育がこれからの教育に、特に低学年の生徒たちに必要なのではないのでしょうか。

賢治先生の授業は、聞く耳を持たない子どもたちを引きつけるところから始まっています。「最近の子どもは聞かないからだめだ」と言っている先生、そんな理屈は成り立たないですよ（笑）。

聞く耳を持たなくても、「任せといて」と言って聞く耳を持たせるような工夫をしなければ、ダメなのです。授業が上手だというある先生に伺ったら、寄席に落語を聞きに行って、いろいろと考えるんだとおっしゃっていましたが、聞く耳を持たせることから始まって、賢治先生は何か持ってきて作業させたり、五感を総動員させる授業を展開したんですね。そして、授業の過程は、スリルとサスペンスに満ちて、次はどうなるんだと生徒たちを自分の授業の世界に引き込んで行ったんですね。そして最後に目から鱗がぼろぼろと落ちるがごとく「ああそうなんだ」と感じさせる。だから、80歳90歳になっても賢治先生に習ったことは覚えてますって言っているんですね。それが今、テスト終わったらみんな忘れちゃったという。こんな教育にはあまり意義がありません。

さらに、賢治先生は、とつても生徒思いで、暴力事件を起こして、退学放校処分になってしまった生徒を、警察に通い詰め、警察署長に頭を何百回下げて不起訴にしてもらい、「この町では住みづらいだらう」と、樺太まで舟に乗って行って、就職口まで探してきて面倒を見たそうです。「私は、賢治先生のごことは一生忘れません」という教え子がたくさんいる

のは、もっともなことなのです。こういう精神的にも、知的にも、豊かな教育、心の通った教育、それは、グルントビーとかロバート＝フルガムといった、外国の教育者の話の例を引くまでもなく、宮沢賢治という教育の先達が我が国にもいるのです。そんな教育は大変だ、大変だという人もいるけれど、そういう教育によってこそ生徒たちがイキイキと育ち、実りの多いものだということ、また、教育って本当に素晴らしい無限の可能性を拓いていくものなのだということを賢治先生は70、80才の生き証人を残すという形で、証明してくれたのだと思います。皆さん、力を合わせて4月からの新たな教育を、子どもたちの心に夢や希望、好奇心や生き甲斐といった灯を点す教育にしていこうではありませんか。英国の詩人W・ブレイクが著した"地獄の格言"という詩集の中の一節に以下のものがあります。

"A cistern contains, a fountain overflows"

これには、『水槽は湛え、泉は湧き出す』という訳がつけられています。私は勝手に次のように解釈しています。「子どもたちの頭を水槽に見立てて、知識という水をいくら注いでも、それは時の経過と共にみんな蒸発して無くなってしまふ。それよりも、次々と発想を湧き出す泉を子どもたちの頭の中に掘り起こすことが大切だ」と。この4月からは、子どもたちの頭の中に発想の泉を掘り起こす教育をしていくことが求められているのです。賢治先生のような授業をやっていこうといっているのです。そのために教育の質を変えようと言っているのです。今こそ先生方を、地域の人々は、教育委員会は、保護者は、バックアップしてあげてください。先生たちは今までやったことのない、しかも、自分自身体験してもこなかったような授業をやっていかなければならないのですから。大変なことなんです。だけど、子どもたちのため、若者たちのため、私たちの未来のために、皆で力を出し合って実現していこうではありませんか。こちらの青少年アンビシャス運動が提言されているように、大人たちがまず意識改革をして、大きなアンビシャスを抱きチャレンジしていくことからはじまっていくのです。本日はどうも長いことご清聴いただきまして本当にありがとうございました。